アフリカとの出会い XIII

日本車天国

竹田　悦子　　アフリカン・コネクション代表

ケニアでは、日本がどこにあるのかを知らない人はたくさんいても、「Toyota」や「Nissan」が日本車であることを知らない人はほとんどいないのではないかと思うくらい日本車熱は高い。日本の車イコール性能がいい、エンジンがいい、長く乗れるということで日本車人気は高いのです。

ケニアでの一般の人々の移動手段は、バス、乗り合いバスやタクシーであり、毎日の通勤や帰省する足として毎日ケニア中を隈なく走っている。バスは、「ＫＢＳ」（ケニアバスサービス）といって主にナイロビなどの都市部で市民の通勤や通学の足として比較的短距離を格安で運行している。

私は数回乗ってみたことがあるが、 朝夕のラッシュの込み具合は、日本の通勤電車に引けを取らないくらいの込みようである。バスと言っても、バスの停留所が在るわけではなく出発地点から終着地点の間にあるメジャーな場所（病院、市場、役所などのランドマークがあるところ、人がたくさん住んでいる所）を中心に停まるという具合なので初心者には非常に分かりにくい。一応一時間に何本というダイヤはあるが、基本的には人が一杯になったら出発というのが多い。

そして人でぎゅうぎゅうになって出発するが、暫くすると切符を切る車掌さんが回ってくる。自分の手さえ動かすのがやっとのスペースの中を押し合ってやって来るのである。運賃は、どんな乗り物よりも安く設定されており、例えば私がたまに乗っていたウエストランドという場所からナイロビ中心にあるバスステーションまでは、日本円にして20円くらいである。乗車時間は渋滞していることが多いこともあり20分くらいである。乗り合いバスは、60円くらい、タクシーで100円くらいであっただろうか。

自分のポケットからお金を出すのも一苦労であるが、盗難にあう確率も非常に高いのが難点である。ポケットに入れた携帯電話、お金など自分も知らないうちになくなっているのだ。ポケットや鞄の一部分が刃物で切り取られていたりもする。だから乗客は、お金は靴の中や帽子の中に入れたり、服の一部分を折り曲げて入れていたりして自己防衛を上手に図っている。私も最初の頃は、携帯電話、パスポート、お金、財布いろいろ盗難にあったが、その度にいろんな人から学び、帰国する頃には何も盗まれなくなった。ケニアでは盗難にあっても、誰も同情しない。まず最初に聞かれるのが「なんでそんな無防備にしていたの？」という批判だ。「そんなんじゃ、仕方ないよ」と言われる。

そんな混んでいるバス車内であるから、車掌さんがすべてのお客から公平に運賃を集めるのも困難である。運賃を集めに来る前に駅が来て降りていく人もいるし、誰が払って誰がまだなのか分からなくなることもあるし、「もう払ったよ」と言ってしまうことも可能だ。

そして払い終わると紙の切符がもらえるが、それをもらう頃にはほとんど降りる直前だったように思う。盗難も多いが、親切にされることも多い。まず子供を連れていると、あちこちからこちらへと席へ誘導してくれる手が伸びてくる。乗り降りも必ず誰かが運転手に待つように叫んでくれるし、荷物も子供も代わりに降ろしてくれる。 なのでお母さんで子供を何人も連れていても、心配なく移動することが出来る。お年よりも、子供もみんな心配なく移動できる。こんなラッ

シュアワーの満員のバスなのに、である。

大型ケニアバスよりももっと人々が利用するのが、「マタツ」と呼ばれている小型の乗り合いバスである。別名「ニッサン」とも呼ばれ、日産のキャラバンのことである。また同じ形のトヨタの「ハイエース」もよく走っているが、これも名前は「ニッサン」と呼ばれている。また車業界の人達は「シャーク」と名づけ、鮫のように道路をすいすい走っていくイメージからくると説明する。以前は、このマタツもバスと同じように乗れるだけ乗客を乗せていたが、新政府になり立ち乗りは禁止され、定員は14名までと定めらている。

マタツは、それはもうケニア全土に網の目の様に路線が張り巡らされていて、どこでもいけるようになっている。マタツには、「sacco（サコ）」という協同組合があり、停留所の場所、運賃、路線数等管理されており、すべてのマタツ所有者はそこに登録し、登録料を払って運営しているのである。

マタツは朝夕は毎分ごとに何台も同じ路線を走っており、バスのように何時間も待ち時間が発生することもなく、きちんと座席があり、快適であるが、スピードが速すぎるのが恐ろしいところである。私はナイロビ市内までマタツで通勤していたが、40km以上離れた町であるのに、渋滞がなければ30分くらいで着いてしまうのである。スピードは時速100kmは超えていたように思う。

ドライバーと言えば、陽気にアフリカの音楽をかけ、歌いつつ運転しているのである。運転はみんなＦ１ドライバー並みに上手であるが、死亡事故のニュースもよく聞く。

マタツの車内には、「マカンガ」と呼ばれる運賃を集める人が乗っている。順番に一人づつ集めていくので、バスと違い払い忘れがない。バスよりは割高ではあるが、２時間乗っていても500円くらいのものなので私には割安感があるが、ケニアの普通の人々はクリスマスに田舎に帰るために旅費を少しずつ貯めている。またお葬式や結婚式、旅行などの時は、運転手つきで一日チャーターすることも出来る。私も、引越しや友達が大勢来た時等よく利用した。一日2000円くらいだったように思う。

車内の楽しみは、ラジオから流れてくる音楽とおしゃべりであった。一日のほんの少しの時間を知らない人とのおしゃべりの中で、私は本当にいろんなことを教えてもらった。日本に来たことがあり日本語が完璧に出来る人もいたし、有名ミュージシャンも普通に乗っていてみんなとおしゃべりしているし、出会いの場でもあった。

特に、ナイロビの市内から田舎に向かうマタツは、乗客が同郷のなじみの顔であることも多く遠足の様な感じでとても楽しい雰囲気であった。また出発を待っていると「この手紙を誰々に渡して置いて下さい」と窓越しに頼まれることもある。

ケニアには52民族いるが同じ行き先には同じ民族の乗客であることも多いので、綺麗な衣装のマサイ族しか乗っていなかったマタツに乗り合わせると、洋服を着てきた自分が妙に浮いていたようなこともあった。みんな私を見て、「ソバ！（＝こんにちは）」と笑ってくれていた。

中古の日本車は、ケニアのいたるところで元気に活躍している。ただどんなに古い車でいいのかというとそうではなくて、７年未満と法律で定められている。日本では流行を過ぎ人気のなくなった車でも、少々痛んだ車でも、あちらでは人々の重要な足として、きちんとメンテナンスされて現役を続けている。

遠くアフリカのケニアでは、新車や中古車の日本車が活躍する日本車天国なのである。